

視 察 調 査 報 告 書
＜文教厚生委員会＞

平成31年第2回沖縄県議会（2月定例会）閉会中

自 令和元年6月6日（木曜日）

至 令和元年6月7日（金曜日）

沖 縄 県 議 会

文教厚生委員会視察調査報告書

視察調査日時

令和元年6月6日木曜日～6月7日金曜日（2日間）

視察調査場所

伊平屋村及び伊是名村

視察調査事項

村の課題等意見交換について（教育、福祉及び医療について）

- 1 伊平屋村役場
- 2 伊是名村役場（産業支援センター）

教育及び学術文化について（離島・僻地の教育の現状と課題について）

- 1 伊平屋村立野甫小中学校
- 2 伊是名村立伊是名中学校
- 3 伊是名村村営塾（小学5・6年生、中学生対象）

社会福祉及び社会保障について（離島・僻地の高齢者福祉の現状と課題について）

- 1 伊平屋村 高齢者生活福祉センターとらず園
- 2 伊是名村 介護老人福祉施設チゼン園

医療について（離島・僻地の医療の現状と課題について）

- 1 伊平屋村 診療所及び歯科診療所
- 2 伊是名村 診療所

視察調査概要

視察調査概要は別紙のとおりである。

参加委員（8人）

委員長	狩 俣 信 子 さん
副委員長	西 銘 純 恵 さん
委員	末 松 文 信 君
委員	照 屋 守 之 君
委員	亀 濱 玲 子 さん
委員	比 嘉 京 子 さん
委員	平 良 昭 一 君

委員 金城 泰 邦 君

委員外議員 なし

議会事務局（2人）

議会事務局政務調査課主幹	比 嘉	猛
議会事務局政務調査課主査	中 本	信

別紙（視察調査概要）

令和元年6月6日（木曜日）

1 伊平屋診療所（13:10～13:30）

医師及び看護師の自己紹介後、質疑応答を以下のとおり行った。

Q 困りごとはないか。

A 診療所の位置が海に近く、数メートルしか離れていないので気になる。高波などが来たら困るので、高い場所に移すことが必要であろう。あとは施設の老朽化。築40年も経過しているので動線の確保やバリアフリーを意識した施設の設計をすべきである。待合室も狭くて外で待っていることもある。

Q 村民の健康状態、特徴は何か。

A 一番多いのは（高血圧、糖尿病といった）生活習慣病である。

Q 透析等で本島に行く場合の渡航費、滞在費の補助はあるのか。

A 交付金を活用した補助は行っている。補助率は2分の1であるが、村民からもっと補助してほしいと常日ごろから要望がある。（村役場担当）

Q 救急医療、搬送はどのようにやっているのか。

A 日中は浦添総合病院までドクターヘリで搬送しており、夜間は自衛隊のヘリで搬送している。年間30件程度の実績である。

Q 医師の勤務環境はどうか。

A 困ったときに相談できる環境、またサポート体制が必要と感じる。

Q マンパワー不足などの喫緊の課題はないか。

A 医師1人、看護師1人で行っているなので、調剤も看護師がやっている。また、患者のケア業務や問診も行っているなので、薬剤師の配置や看護師がもう一人必要と感じている。

2 伊平屋歯科診療所（13:30～13:45）

歯科医師、歯科衛生士及び歯科助手の自己紹介後、質疑応答を以下のとおり行った。

Q 患者は月何名くらいの状況か。

A 月平均70名程度である。患者がふえてきており、特に夕方に多く7時ごろまで診療所をあけている。

Q 患者がふえているということだが、村民に対してどのように周知等しているのか。

A ことしから中学生以下は無償化されていることもあり、学校での歯科検診時に歯に興味を持ってもらうよう説明したり、学校帰りに顔を出すよう周知しているので子供の患者はふえている。お年寄りには歯科に行けば歯を抜かれるというイメージが強く、虫歯がひどくなるまで放っておく傾向にある。

歯に関心を持ってもらうために、商店などの目につくところにポスター掲示を行い周知を図っている。

3 伊平屋村の課題等意見交換会（13:50～15:50）

最初に狩俣委員長から挨拶。次に副村長から歓迎の挨拶の後、教育、福祉及び医療担当部署から各分野の現状と課題について説明を受けた。

(1) 教育の現状と課題

伊平屋村では就学前から就学後の教育活動を、遊びを通じた総合的な指導から教科の指導につなぎ、15歳の島発ちに向けみずから気づき、考え、行動できる人材の育成に向けて島全体で取り組んでいる。これを伊平屋での「島発ち教育」と考えている。

施策になっている主な島発ち教育は4つあり、1つ目に東大塾、2つ目に東大訪問・交流とディズニー研修をリンクした取り組み、3つ目にてるしの塾、4つ目に教職員研修でのライフスキル教育。

まず人間力を高める取り組みである東大塾。8月に小学校6年生から中学校3年生までの全児童・生徒を対象に開催し、ことしで9年目になる。

学ぶことの大切さを感じとれたり、学ぶ意欲を高めたり、困難に対して乗り越えようとする力をつけようと、講師、スタッフが協力しながら進めている。基本、応用はもちろん、何のために学ぶのか、何をどのように学ぶのかということをも東大生が徹底して指導していく。また、勉強だけではなく毎年、東大生企画として語り場と称した大学紹介、上京後のつらさや学ぶ楽しさなどを伝える、コツを伝える場を設定している。また、児童生徒の差、悩みを解決するために秋の東大訪問では児童生徒が企画運営となる場、交流の場を設けている。

次に人材育成、東大訪問、交流、ディズニー研修について。秋に東大生と再会し、夏休み以降の課題・問題解決と今後への助言などで交流を深め、その後のディズニーリゾートでの研修に参加し、気づく力を育む。この2つの事業をリンクさせることによって、夢や目標に向かって頑張ろうとする力を後押しし、島発ち教育のさらなる充実を目指している。

次に、てるしの塾について。「確かな基礎学力」の定着、「粘り強く取り組む力」の育成、「気づき、考え、解決する力」の育成の3つを目指して4月から3月までの1年間、中学校1年生から3年生を対象に週3日行っている。また、学力向上以外でも地域活動の充実支援として、「伝統文化学習の日」を毎週水曜日の午後4時から部活動等を休みにして1時間程度実施している。ほかにグローバルな人材育成に向け海外短期留学の実施や島外で暮らす村出身高校生をサポートするために、追跡調査や 激励会を行っている。

次にライフスタイル教育セミナーの実施。教職員の指導力向上及び指導技術のスキルアップを図ることを目的に実施している。校内研修、学校訪問等での指導助言など教師力の向上を図っている。

(2) 高齢者福祉の現状と課題

福祉に関しては多岐にわたっているので、「ゆりかごから墓場まで」という形で村では説明を行っている。

村の現状として、人口は減少傾向にあり、令和元年6月現在で1238名であり前年より10名減少している。高齢者人口—65歳以上の人口はここ10年は横ばいで推移しており、平成30年6月現在、337名で割合は27%となっている。総世帯数に対する割合も4割で推移していることから、いわゆる独居老人が多いという村の実情がある。村の課題としては、高齢者福祉に携わる職種、職員、質を含む人材が不足しているため、人材の確保が課題になると思われる。そのため 安定した質の高い高齢者福祉サービスを提供できない状況にある。

次に、島外からの積極的雇用を視野に看護協会ナースセンター等と連携して看護師、保健師及び栄養士の確保に取り組んだが、1週間程度の短期雇用にしかなっていない状況にある。昨年から県社会福祉協議会と連携して県内外から専門職の方を招聘して、島の実情を知ってもらい福祉や保育の人材確保に向けて取り組んでいこうとしているが、来村後に居住させる住まいが確保できない問題がある。

将来的な展望として介護福祉士や看護師、保育士等やボランティア人材を整備しながら人材の確保ができればと考えている。

(3) 医療の現状と課題

診療所及び歯科診療所の両施設ともに、住民生活の安心・安全のよりどころとなっており、離島医療、離島診療の充実をもって定住などといったところにも大きく寄与するものと考えている。

施設の現状としては、診療所が築42年、歯科診療所が37年経過し、高齢化が進む中、時代のニーズにマッチしていない施設であり、扉、通路が狭小により車椅子が利用しづらい状況にあるなど、バリアフリーが進んでいない。

村としては第4次総合計画において、村の将来像は「島に住む幸せ」を柱に据えているが、医療福祉サービスの確保は大きな課題として取り上げられている。医療体制の充実に取り組んでいるところだが、中核を担う診療所、歯科診療所が、総合的かつ基本的な医療活動が行えるよう、施設のバリアフリー化並びに高台への移転を行っていただきたいというのがドクター、利用する村民の共通する意見である。

各分野の現状と課題の説明が終わった後、伊平屋村から以下の3点の要請が読み上げられた。

- ① 伊平屋村社会福祉協議会会長から「福祉、介護人材の確保に繋がる住環境整備及び育成について」
- ② 副村長から「診療所・歯科診療所の老朽化に伴う建て替え並びに高台への移転について」に最新の設備の設置についてを追加した。
- ③ 教育長から「教職員における人事異動の見直しについて」

要請を読み上げた後に質疑応答が以下のとおり行われた。

Q 村の教職員は何名か。

A 小学校で34名、中学校で9名で合わせて44名くらい。

Q 教職員は30代がメインと聞いたが、やはり僻地教育に対する理解はまだまだなのか。

A 沖縄でも僻地教育研究大会というのをやっており、提案すべきことはあるのだけれど、新しい教師が島に来るとプラスアルファを期待するが、勤務時間内で終わってしまうのが実情である。那覇地区や島尻地区の離島とは違う。地区によっていろいろ扱いもある。それは権利だから批判はできない。

Q 要するに6地区単位の人事交流に取り組んでほしいということか。

A これは離島だけの話ではない。広域交流を持ってやればバランスがとれるのではないかと思う。

Q 村独自で東大塾をやっているが、その効果と村の財源は年間で幾らか。

A 年間200万円程度。今までは高校進学が県内の高校に限っていたのが、県外の高校、そしてその高校のある県外の大学、あるいは海外と子供たちの意欲として広がってきており、視野が大きく広がっているということが効果として見えると思う。

4 高齢者社会福祉センターとらず園（16:00～16:25）

(1) 住民課長の施設概要説明

平成8年開所で、入居者は20名、職員は社会福祉協議会、とらず園を合わせて35名。通所介護サービス事業所なので、月曜から金曜の10時から4時までデイサービスを行っている。利用者は約40名。入居もあるので24時間体制をとっている。ヘルパーは10名で、介護員の資格者は5名。

伊平屋村は高齢化が顕著に進んでいるので、将来を見据えて施設の増床を視野に入れた計画を進めていくとともに資格者もふやしていく考えであるが、課題は人材確保である。施設利用者に快適に過ごしてもらうために、県外からでも人材を確保したいと考えている。

(2) 質疑応答

Q 利用待ちの人はいるのか。

A ここでは要介護2から3の人がデイサービスを利用して、待ちの状態ではない。またこの人たちも地域に戻れば、社協の人がミニデイサービスを月に2回、5集落あるので10回行っている。ふやしてほしいと要望はあるが、職員が少ないのでなかなか応えることができない状況にある。

質疑応答終了後に、デイサービス利用者との交流を行う。

5 伊平屋村立野甫小中学校（16:30～16:50）

狩俣委員長から挨拶の後、教育長から資料4「野甫小中学校要覧」に基づき概要説明を受けた。

(1) 概要説明

明治36年に開校、今年で約120年。1階部分とグラウンドは小学校、2階部分と体育館は中学校に施設管理上区分されている。

児童生徒は、小学生が11名、中学生が8名の計19名在籍している。教職員数は12名である。

現在の校舎は昭和58年に建築され、38年経過している。耐震基準は満たしているが老朽化が激しい。壁や軒下が膨張してコンクリートが剥離したりするという状況にあり、予算確保に向けて調整しているところである。

(2) 質疑応答

Q 若い先生が多いが、もともとの居住、出身はどこか。

A 那覇、中部、名護等はあるが、地元はいない。

Q 宿舎はあるのか、快適か。

A 家族5名で来ているが、自然環境に恵まれていて、快適ではないが充実した生活を送っている。

Q この学校で何校目の赴任になるのか。

A 2校目、3校目の教員が多い。

要望として、宿舎の改築等があればより快適に生活ができ、また、伊平屋に赴任したいという人も出てくると思うので、改築、修繕してほしいとの意見があった。

6 伊是名村村営塾（19:00～20:00）

19時から15分程度、小学5、6年生の授業の見学、19時45分から15分程度、中学生の授業を見学した。

また、その間の30分間に、教育長挨拶及び資料をもとに村営塾の概要説明を受けた。

(1) 概要説明

村営塾は平成24年度に一括交付金が創設されて以来、活用し実施している。

人材確保が難しかったので、ことしで3年目になるがプロポーザル方式一企画提案してもらい、審査をした上で業者を決定している。

東大塾も活用していたが、落ちこぼれとか、どこまでできているのかは、ネットではどうしてもわからない。対面して接することでわかる。

これまでは、簡単に答えを教えるという子が多かった。学習の習慣化という自分で調べることを身につけさせることが必要と考えている。

(2) 質疑応答

Q 一括交付金で実施していると聞いたが、子供たちから費用をとっているのか。

A 塾と学習支援という形で2300万円程度の事業を実施している。教材費等も含めて子供たちから費用は徴収していない。無料である。

Q 高校への合格率はどうなっているか。

A 3年連続で100%となっている。

Q 学校との連携はどのように行っているのか。

A 小学校の場合、週に4日は学校に行くので、教頭や担任と意見交換をして情報を共有している。

また、中学校の場合は月に1回報告書を教育委員会に提出しており、これと同じものを学校にも提出し、情報交換を行っている。生徒の人数が少ないので情報共有は行き届いている。

Q 関心を持たせるために何か工夫していることはあるか。

A 小学生の場合、ポイントカードをつくって問題をクリアしたらポイントを付与して、ポイントが貯まったら景品をあげるシステムをとっている。子供たちの競争心をあおっている。

中学生の場合は、本島の子に比較したら自立が早いので、年に3回、キャリア形成プログラムを入れて、その中で逆算の行動計画の立て方、目標達成の仕方などをセミナー形式等で実施している。

令和元年6月7日（金曜日）

1 伊是名診療所（8:30～9:00）

医師、看護師及び嘱託看護師の紹介後に質疑応答を以下のとおり行った。

Q ここで一番困っていることは何か。

A 医師1人、看護師1人なので、かわりの医師等が来ないとなかなか本島に行くことができない。プライベートな時間がなかなかとれない。

また、薬剤師がいないことや福祉の関係でいうと、訪問介護など家で医療を提供することが厳しい。みとりを希望していることに対し十分なサポートができない。離島における在宅医療の制度がもっと整備できれば、家族と患者が穏やかに過ごせると思っている。そこが課題かなと。

Q 異動ローテーションは怎么样了。

A 離島赴任期間は大体1年から3年となっている。

Q 医療的に困難な状況でどうにかしてほしいといったことはあるか。

A 他の離島と比べて道幅があり救急車があるのと消防団員は多いので、救急搬送は問題ない。医療機器については超音波機器が少し古く、他の離島診療所と比べて性能が低いので買い換えが必要だと思う。

Q 宿舎はどうか。

A 築40年以上の建物であり、また大家的な人がいないので、その場しのぎの修繕等で済まされていて、県立病院の財産ではあるが、メンテナンスがきちんとされていない状況にある。現状トイレが使用できないし、水圧も弱い。また、家のつくりが変わった形であり、昔の沖縄風でもない。

Q どういった環境があれば沖縄県で医師として残りたいと思うか。

A 離島勤務が終わった後に県立病院で勤務する場合、再トレーニングカリキュラムを構築してほしい。いきなり入院患者を診ろと言われても不安である。あと総合診療医の働き方、県全体で総合診療医の定着、働き口があればいいと思う。

2 伊是名歯科診療所

視察は診察が始まったため取りやめた。

3 伊是名村の課題等意見交換会（9:15～11:00）

狩俣委員長から挨拶、委員の紹介の後に村長から歓迎の挨拶及び職員の紹介を行った。その後、狩俣委員長に対し要望書を読み上げて手交。

要望書の内容は、①伊平屋・伊是名架橋の早期実現について、②沖縄振興予算の拡充について、③北部地域における基幹病院の整備について、④離島患者等支援事業補助金について、⑤離島高校生の就学支援についての5項目。

要望書手交後に教育、福祉及び医療各分野の現状と課題について説明を受けた。

(1) 教育の現状

伊是名村の教育目標として、離島というハンデを乗り越えて、郷土の自然・文化に誇りを持って子供たちが育ってほしいという願いが込められてい

る。その中心的な考え方は島発ち教育を据えている。

子供たちは10名から17名の小クラスで過ごしているので、生徒間交流体験が非常に希薄であることから、北海道の日高小学校との交流体験事業を実施している。また、児童生徒島外諸教育活動支援事業として、スポーツを通じて本島の大規模学校との交流事業を数多く設定している。

この2つを柱にして、生徒指導、教育に頑張っているところである。

(2) 高齢化福祉の現状と課題

伊是名村においては、現在高齢化率が30.5%で約3人に1人が65歳以上の高齢者となっている。人口も減少傾向にあり、平成30年6月現在では1443人と平成20年から279人減少している。このような中で高齢者夫婦の世帯や高齢者のひとり暮らしが多く、高齢者のひとり暮らしの世帯は182世帯で、65歳以上の人口に占める割合を見ると55.8%となっている。

また、高齢者を取り巻く介護保険制度もなくてはならないサービスとなり、利用者も増加し、団塊の世代が後期高齢者となる2025年を見据えて「包括ケアシステムの構築」に向けて各種施策を推進し、地域ぐるみで自立支援の事業を実施している。

これからの団塊の世代を迎えるに当たって、生活支援体制整備の強化、認知症施策を実施するためにも、介護支援専門員の増員や社会福祉士、理学療法士などの専門分野で活躍できる人材の確保も不可欠と考えている。

(3) 医療の現状と課題

診療所においては、県立北部病院から医師1名、看護師1名が派遣されている状況にある。診療については平日の外来受診のほか、地域の実情に合わせて学校健診、予防接種、地域の訪問診療や夜間の救急診療など、24時間拘束された状態での医療体制であり、大変負担をかけている。看護師についても、診察補助以外にも健康指導、採血、調剤業務まで担っている状況にある。

離島に配属される医師・看護師については、住民の医療・健康を守る職員であることから、代診、代看がとりやすい環境を望む。

最後に住環境の整備について、診療所については築28年、医師住宅については築42年が経過し耐用年数も超えている状況にある。看護師の住宅はなく支障を来している。歯科診療所も築37年経過しており、老朽化で雨漏り等があり、防水工事などで施設を維持している。また、交換時期にある医療機器の購入や高齢者の訪問診療に要する機器の整備など、村の財政負担に支障を来している状況にある。

(4) 質疑応答

各分野の現状と課題の説明の後に質疑応答が以下のとおり行われた。

Q 離島巡回診療が停滞していると説明があったがその理由は何か。

A この事業は県の地域医療支援センターが県から受託している事業で、離島巡回ヘリ等運営事業というものがある。この事業は、専門医が民間のヘリを利用して一昨年は耳鼻科を希望して行ったが、去年は1年間ヘリが故障等により飛ばなかったことにより実施できなかった。

Q 補助事業の中で県にどうしてほしいという要望はないか。

A 助成事業の中で「離島患者渡航費助成事業」というものがあり、他の事業は大体予算の負担が2分の1と明確になっているが、この事業だけ補助率が基準額の2分の1となっており、残りを村負担としている。渡航費だけでなく宿泊費についてもそうであり、本島での交通費については全額村負担であることから、県に補助していただきたいとの要望がある。

Q 診療所や住居の老朽化、看護師の住居がない等で要望等をこれまで行ったことがあるか。

A 離島・僻地及び診療所所在地の主管課長会議の中で議題に上げて、離島における診療所で一番古いということを訴えて、老朽化調査をしてもらった。

Q 学校運営面のデメリットとして、教職員数が少ないためにバランスのとれた配置が行いにくいと資料にあるが、現状について説明いただきたい。

A 小規模校はどこでも同じ悩みだと言えると思うが、特に中学校だと専門科目があり、最低限、高校受験に必要な5教科の専門教科の先生を配置してほしいがなかなか厳しいところがある。配置されても2教科以上の兼任。児童生徒数に関連して配置数も決まってくるので、その辺で先生方の埋め合いがある。

Q これまでは島から出て行って頑張りなさいということだったが、時代の流れとともにぜひ帰ってきてほしいという願いがある。島を出た後から高校生たちとの意見交換あるいは郷友会の関係の中でのサポート、支援体制が今後重要になると思うが、追跡調査とかやはり郷友会と連携しながら、出してしまった子供たちをどう引き戻すか。意見を聞きたい。

A 現在、島から出ていく前に中学生を対象に、島出身で沖縄本島で活躍され

ている方々に体験談を交えて激励する場を設けている。子供たちに島から出ていっても頑張っしてほしいという強い思いと相反して、また島に戻ってきてくれというのが非常に難しい。

4 介護老人福祉施設チヂン園（11:05～11:40）

(1) 施設長の概要説明

平成3年度に開設。定員は入所30名、ショートステイが10名。昨年度実績（年平均）で入所27.0名、ショートステイが5.5名である。

島の特徴として、利用している人の約4割は身元引受人が島に一人もいない。子供はみんな島から出ており、子供が来いと言っても本人が応じない、島にずっといたいというのが本人の希望である。

法人のサービスとして、週に2回理学療法士に来てもらいリハビリを行っている。理学療法士には報酬は支払っているが、利用者からは介護報酬は取っていない。

昨年の施設でのみとりは7名。特別な事情がない限りここでみとる。他の施設ではそうではない。

平成29年に一括交付金を活用してショートステイを10床分新設したが、資材等の確保がどうしても島外になり、坪単価が187万円余りかかっている。

次に、居宅介護支援事業所。人件費が150%で人口が少ないと経営的に成り立たない。今の人口の1.5倍、伊平屋と合わせたら成り立つかなと。

3点目に平成30年度から、定員30名の小規模特別養護老人ホームの介護報酬が4%引き下げられた。小規模離島の特別養護老人ホームは、ほとんど赤字になっている。

4点目に、課題としては人材確保がある。看護職、ケアマネジャーを確保するのにずっと四苦八苦している。介護職等の資格保有者が、村出身者だけでは不足。村外から採用せざるを得ないところであり、県から補助があるのは大変助かるが、県が人材を確保し、派遣するようなシステムを構築できないか要望したい。

(2) 要望事項

みとりをやっているが、制度上の問題で介護報酬のみとり加算が取れない。みとりを行った家族や地域の人たちの寄附で助けられているところもあるが、加算取得のためには、常勤の看護師配置が1人以上必要だが、現在常勤の准看護師が1人、非常勤の看護師（退職後のUターン者）0.7人である。配置基準は准看護師を含め1名だから基準を上回った配置にはなっているので、小規模

離島の特例を設けてほしいとの要望があった。

説明を受けた後、施設の見学を行った。

5 伊是名村立伊是名中学校（11:45～12:10）

各学年の授業の様子、図書室などを見学後に、校長先生の挨拶及び学校の概要説明を受けた。

(1) 概要説明

伊是名中学校は、1年生14名、2年生12名、3年生9名が在籍している。

「伊是名中学校グランドデザイン2019」を策定しており、その内容は、教育理念は「海島有大志」、テーマは「島たちの教育」、教育目標は「学習意欲に燃え、自ら進んで学ぶ生徒（知）」、「情操豊かで思いやりのある生徒（徳）」、「心身とも健康でたくましい生徒（体）」、重点目標は「つながり、きき合い、支え合う」となっている。

また、学習を支える力、つながる力として、「あいさつ（心を開く、つなぐ）」、「立腰と黙想（心と体を整える）」、「朝の読書（心と頭を磨く）」、「黙働清掃（心を磨く）」としており、①整理・整頓・清掃が行き届いた学校、②あいさつや歌声が響き渡る学校、③豊かな心を持った生徒・教師・保護者・地域の人が集まる学校、④「つながり、きき合い、支え合う関係がある学校」を掲げている。

(2) 質疑応答

概要説明後に質疑応答を行った。

Q 人権教育に力を入れているということだが、そのことについて教えていただきたい。また、小さな学校でもいじめがあり、カウンセリングを実施したとのことだがどうか。

A 人権宣言は、入り口のところにも掲げているが、資料の20ページ、右欄の中段にあるが「伊是名中学校の人権宣言」として3項目あり、「一、今ある命に感謝する」、「二、互いに協力し合い、助け合う」、「三、人の心を傷つけるような事は絶対しない」という宣言である。

暴言というか、言葉がきつところもあるので、いじめと認識したことが何件かあった。そういったときはカウンセリングを行っていた。

月に1回程度、カウンセラーの先生が来るので、小学校からずっとこの子供たちを見ていて、クラス全員のカウンセリングの習慣をつくって行っていた。

特に暴言のひどいときは親と一緒に話をしたり、SNSを使った中傷も狭

い島だがあったので、そういったときもいじめと認知した対応をするようにした。

伊平屋村、伊是名村視察調査(令和元年6月6、7日)

伊平屋診療所



伊平屋歯科診療所



伊平屋村役場



とらず園



野甫小中学校



伊是名村村営塾



伊是名診療所



伊是名村役場



伊是名村役場



チデン園



伊是名中学校

